

「金沢大学校歌」論 一歌い継ぐ戦後一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00054907

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「金沢大学校歌」論 — 歌い継ぐ戦後 —

團野光晴

1 はじめに

石川県金沢市に所在する金沢大学（金大）は、旧制第四高等学校（四高）、旧制金沢医科大学、金沢高等師範学校、石川師範学校、石川青年師範学校、金沢高等工業学校（後の工業専門学校）などの旧制学校を併せ、戦後の新制大学として一九四九（昭和二四）年に発足した。その一〇年後の一九五九（昭和三四）年五月二九日に「金沢大学校歌」は制定される。作詞は地元金沢出身の文豪として日本近代文学史に名を残す室生犀星、作曲は戦前に山田耕筰と並び音楽界の重鎮と目された信時潔である。

『金沢大学五〇年史 通史編』（同編纂委員会編・二〇〇一年八月）の第四章「新制金沢大学の発足」の七項「開学十周年記念事業」の一「記念事業の概要」が伝えるところに拠ると、「金沢大学校歌」は五九年五月二八―三一日に開催された「開学十周年記念祭」における二九日の「開学十周年記念式」で披露された。併載の「写真4―7 金沢大学校歌を披露する合唱団」には、「金沢大学10周年記念

記念祭の夕べ」と書かれた看板を背景とした舞台上で、指揮者を前に二〇名ほどの女声合唱団が歌う様が写されている。同箇所では、「記念式典席上、初代学長として六一年まで在任した戸田正三学長が、一〇年間を勤めた格別の思いからか感激の眼うるませ、「過去十年間は旧制帝大の充実にいくらかおくれたようだが、今後の十年間でこれを追い抜くものになりたい」と抱負を力強く語ったと報告されている。また記念祭は学生が中心となって展覧会や大運動会などが催され、一般客や教授たちも巻き込んで大いに盛り上がった。その様子は「学生が大学として一体となり、それを自分たちのものとして祝賀している様子を見ることができると評されている。学長以下教職員と学生がともに手を携え、戦後新制大学という新しい自分たちの学校を自ら築き上げていこうとする草創期金大の活力の中で「金沢大学校歌」は制定されたのだった。新制大学の校歌制定とそれをめぐる時代の雰囲気というものは、今日から見て特筆に値し、興味深い。五六年の「経済白書」に「もはや戦後ではない」と言われ、六〇年安保・高度経済成長を直前に控えた当時の日本社会の一面面

が、「金沢大学校歌」とその成立にまつわる状況に垣間見られるのではないか。本稿ではこの観点から、各種資料を参照しつつ「金沢大学校歌」を検討し、考察を試みたい。

2 「金沢大学校歌」の成立事情

さて前掲「金沢大学五〇年史 通史編」は、第四章七項の三「金沢大学校歌」の制定」で、「金沢大学校歌」の成立事情について次のように記す。

委員会の記録によると、当初は「歌詞を職員、学生より懸賞募集する、作曲は専門家に依頼」の計画であった。しかし、一九五九（昭和三四）年四月の評議会で異論が出たようである。作詞作曲とも専門家に任せることとなり、戸田学長は犀星宛に「作詞を郷土出身の貴下にお願ひ致したい」旨の書状を急ぎよしたためることとなった。四月一八日、東京大田区の犀星宅へ使者が向うき依頼したところ、承諾を得た。その交渉の際に、作曲は信時潔に依頼して欲しいとの要請が犀星から提案され、早速使者は帰途信時家にも立ち寄った。

やや制定の秘話に属するが、後日犀星・信時両者会合の際に「校歌発表は教育学部音楽教室全員、少なくとも一〇〇〜一五〇人位の合唱で実施」すべしという条件に加えて、十周年の「校歌制定は結果だが、あまりにも泥縄式であると非難され」たようである。一カ月前の直前になって依頼したことへの不満が、両大家から述べられたのであろう。こうした経緯から心配されたが、校歌は約束どおり

五月の中旬無事大学に届けられ、記念式の最後に学生などの合唱団によって披露された。なお、その時のメモに「謝礼については室生、信時両氏とも言及されず」とも書き残されているが、別の記念行事予算の関係資料中「作詞作曲見積金額十万円」と記されている。

同書第四章七項の一では、同七項の記述の基となる資料として、当時の事務局庶務課・石田龍次課長補佐が整理した「開学十周年関係綴」が挙げられている。金沢大学資料館所蔵の同資料を二〇一七年九月四日に閲覧したが、それによって補足すると、五九年三月二二日起案の同二六日午後一時三〇分開催を通知する「開学一〇周年記念準備委員会の開催について（通知）」に続いて綴られた「開学一〇周年記念式及び記念行事並びに記念事業について（案）」（横野便箋ペン書きのもの）と活字印刷のもの）では、校歌制定について「歌詞を職員、学生より懸賞募集する。作曲は専門家に依頼し、歌詞選考は選考委員（学内）を委嘱して決定する」とされている。しかし「Z/A評議会提出案」（注・四月一七日開催の評議会で提出された案の意と思われる）と上部欄外にペン書きされた「開学一〇周年記念記念式及び記念行事並びに記念事業について（案）」（横野ペン書き）では「作詞、作曲を専門家に一任する。見積金額一〇〇、〇〇〇円」となっている。

続いて「昭和三四年三月十八日」（横に鉛筆書きで「四月の間違いか？」と記載）付で戸田正三学長から犀星宛での依頼状が綴られ、さらに「校歌制定について」と題された横野ペン書きのメモが綴られる。これには「四月一七日評議会の決定」に基づき石田庶務課長補佐

室生犀星氏に作詞依頼に行くこととする」との記載に続いて、依頼の様子が記される。これによると、石田は四月一七日二〇時に金沢駅を出発、翌一八日七時二〇分の上野駅に到着し、九時三〇分は大田区馬込の犀星宅に参上、「資料を提出説明し、五月一〇日迄に作詞完了の確約を得る。／＼但し、条件として作曲家に信時潔氏をお願いしたい旨を申出られ、早速電話にて照会され、四月一九日午后参上の旨を連絡され」となった後、一二時一〇分犀星宅を辞去する。翌一九日、一〇時に「石坂名譽教授宅を訪問、一〇周年記念式に参列及び講演方を依頼したるも辞去された」後、「尚、昼食を馳走になり／＼四時 辞去」する。そして「一五時三〇分 信時潔宅訪問せるも急用のため不在／＼一六時 四月二〇日午前中に訪問することとして辞去」。翌二〇日九時三〇分「信時潔宅訪問、室生氏よりの伝言を伝へ、作曲を依頼するも、時間的に無理があるため、五月五日迄に作詞を廻付方を室生氏に交渉されるよう要望あり。／＼五月一五日午前一〇時、指揮者と同道にて頂戴に参上することに了解された。」という事になった。この後、先述した校歌の演奏形式についての指定と、犀星・信時から「泥縄式」と苦情が出たことが記載されている。これに続いて綴られている同年五月一八日起案・一九日付「校歌の作詞、作曲の完成について（通知）」では、「かねて依頼中の校歌の作詞、作曲が別紙のとおり出来ましたのでお知らせ致します。」とあり、五月一八日までには校歌歌詞・楽譜原稿が大学当局に正式に受理されていたことをうかがわせる。

金沢市・室生犀星記念館編「犀星校歌集」（二〇〇六年三月、同館発行）所収の五九年四月三〇日付石田龍次宛作詞原稿添え書きには

「原稿同封、信時さんは写しを当方から便宜送付致し置きました。」とあることから、犀星は同年四月一八日の依頼を受けて三〇日までの一三日間で歌詞を書き上げ、信時は四月三〇日から五月一五日の一日間で作曲したことになる。もちろん多少の前後はあるだろうが、ともかく「金沢大学校歌」は非常な突貫工事で制作されたことがわかる。当初学内公募することになっていた作詞を披露一カ月前になって急遽変更し、直ちにその日の夜行列車で使者を上京させて翌朝飛び込みで犀星に作詞を依頼し、犀星の指名を受けて直ちに信時に作曲を依頼、その場で締め切り日の約束まで取り付けて制作させるといふかなり強引なことが行われたわけだが、苦情を言いながらも受けた依頼についてはほほ締め切りを守り、披露本番までに校歌を仕上げた犀星・信時のプロ根性にはさすがと感服させられる。後述するように「金沢大学校歌」は、校歌としてはかなり異色だが見事な仕上がりぶりを見せており、切迫した状況での制作を強いられた中、犀星・信時とも持てる力をフルに発揮した様子がかがわれる。急な依頼を敢えて受け、直ちに作曲者として信時を指定する犀星の積極的な制作姿勢には、たびたびコンビを組んで校歌制作に当たった信時に対する信頼と、高等教育を受けられなかったことによる大学への強い憧れが郷里のナンバースクール・四高を受け継ぐ新制大学からの校歌作詞依頼という形で成就したことから来る意気込みも存するよう思われる。

3 「金沢大学校歌」 歌詞の分析 — 新制大学の理想像 —

さて、「金沢大学校歌」の歌詞は次の通りである。前掲「犀星校歌集」所収の原稿影印及び翻刻から全文引用する。

あま 天うつなみ けぶらひ、
あま 天そそる 白ねの
けつ 北方のみやこに学府のありて
せん 燦たる燈をかかけたり。

ひと 人は人をつくるため、
のろしをあげ、
ちから 慧智の時間を磨く、
はえ 光榮ある人間をつくらむと。

しん 新風文化の扉は開かれ
あたらしの人、世代にあふれ、
手はつながれ 才能は結ばれ、
こぞりてわが学府につどへり。
こぞりてわが学府につどへり。

ところで筆者（團野）は一九八六年四月から九二年三月まで金沢大学及び同大学院に在籍し、男子学生寮である北溟寮に入居していた。「金沢大学校歌」は、当時の多くの一般金大生にとつてはあまり

なじみがなかったように思われるが、金大三寮（男子寮の北溟寮と泉学寮、及び女子寮の白梅寮）の寮生にとつては寮歌の一つとして親しみが深く、特に北溟寮生は原曲から大幅にテンポを引き伸ばして大声で歌う独特の歌い方でよく歌い、体に染みついていた。その北溟寮OBである筆者の目から見ても、「金沢大学校歌」は、校歌としては一風変わったという感がある。まず三連に分けて書かれているものの、一番しかなく、七・五などの定型も全くない。これは校歌としてはかなり珍しいだろう。またその演奏は金沢大学ホームページの「沿革・校歌」で聴くことができるが、メロディは美しく格調高いものや少し変わっていてなかなか複雑であり、すぐに覚えて調子よく歌える歌とは言い難い。つまりこの歌は犀星の個性をかなり反映したもので、独特のリズムを持つ犀星の歌詞を活かすような信時が巧みに曲をつけることで、校歌としては相当ユニークなものに仕上がった歌であると言えよう。

ただこれはあくまで校歌であるので、詩人・小説家としての犀星本来の抒情や主題を見て取る余地はあまりないと考えるのが実際的であろう。しかし、この歌が犀星独自のリズムとともに、この時期の犀星特有の卓抜した象徴造形の技巧によって、校歌としては異例の高度な芸術性を達成していることも確かである。「金沢大学校歌」制作当時の犀星は、小説「杏つ子」（五七年一〇月、新潮社刊）で読売文学賞、評伝「我が愛する詩人の伝記」（五八年一二月、中央公論社刊）で毎日出版文化賞、小説「かげろふの日記遺文」（五九年一月、講談社刊）で野間文芸賞と、立て続けに名だたる文学賞に輝き、また全文を会話体で通した実験的小説「蜜のあはれ」（五九年一〇月、

新潮社刊)が話題になるなど、一九六二年の逝去を控え最晩年の絶頂期を迎えている。この時期の充実した力量と技巧が、急な校歌依頼に際して瞬間爆發的に發揮され、「金沢大学校歌」に結晶したと考えるのは自然である。従つて同時期の犀星文学に共通する方法が作詞にも採用されたと想定し、その方法を読むことで「金沢大学校歌」を分析評価するということは妥当であらう。

この観点から注目されるのは、五九年六月八日付の新保千代子宛葉書の文面である。これは「金沢大学校歌」歌詞脱稿から一ヶ月余り、校歌完成から三週間ほどの段階でのものであるが、ここで犀星は「やはり近頃では「かげろふ」と「蜜のあはれ」が精根かけて書いてゐたと思ひます」と述べている。「かげろふの日記遺文」は「婦人之友」に五八年七月から五九年六月まで、「蜜のあはれ」は「新潮」に五九年一月から四月まで連載されている。両作品の脱稿直後に校歌制作の依頼が来たわけで、この両作品の技巧がそのまま「金沢大学校歌」制作に流用されたことは充分考えられる。事実、これら三作品には、現実と非現実とを交錯させることで高度な象徴を作り出す技巧が、共通して見られるのである。

「かげろふの日記遺文」では、藤原道綱母「蜻蛉日記」の外伝としての体裁を取ることによって可能になった、登場人物の経歴や出来事の背景の大幅な省筆が、肉感を伴つて具体的に描き出される登場人物たちを本質的に抽象的な存在にする。そしてこれらが速いにしへの平安朝を舞台に立ち回ること、現実と夢幻、生身の人間と素性不詳の幽霊的人物が交錯する非日常的空間が開かれる。そこで展開する三角関係のもつれは、生々しい醜悪さと苦惱を伴いながら次第に

煮詰められて聖性を帯び、最終的に「生きた二人の女といふものが、思ひ余つて一人になるといふことも、そして一人の殿に仕へるといふことも、有り得るやうな気がいたして参りました」という強烈かつ純粹な愛の形を示し、「生きてゐる限り、ものの終りといふものは、何処にもないのではないか」という永続性を帯びた普遍的象徴美に昇華される。「蜜のあはれ」でも、リアルに描かれた戦後の世相を背景に、世に背を向けた老作家をめぐつてアプレケール風の少女の姿をした金魚の化身と老作家を慕う戦前に死んだ女性の幽霊が出現し、夢と現実、過去と現在が交錯する中、少女の奔放な生命の輝きを中心として、純粹かつ強烈な愛が象徴的な美として結晶する。この現実と超現実とを取り混ぜて象徴を形成する「かげろふの日記遺文」「蜜のあはれ」の方法は、「現実を超えた「優美な抒情詩」と化している」という「かげろふの日記遺文」評や、超現実の世界を描く「蜜のあはれ」で獲得した夢幻能の手法が王朝ものの「かげろふの日記遺文」で効果的に用いられているとする星野晃一評⁸⁾のような形で、既に指摘されているところである。

同様に「金沢大学校歌」でも、冒頭の二行で簡潔かつ深遠な象徴が造形される。すなわち「天うつなみ けぶらひ、/天そそる 白ねの」の箇所であるが、二行目が加賀の白山という郷土を代表する山を歌っているのは明らかかなもの、書き出しの「天うつなみ けぶらひ」は、よく考えると何を歌つたものが今ひとつ判断らしめない。筆者(團野)は漠然と、「天うつなみ」は天で波打っている波、すなわち雲海であると解し、これが「けぶら」っている中、二行目で雲海を突き抜けて聳える白山のイメージが浮かび上がってくるも

のと思つていた。しかし前掲『犀星校歌集』所収の「金沢高等師範学校校歌」(一九四六年一〇月二十四日制定、弘田龍太郎作曲)を見たところ、三番に「北つ海 わきたち/天うてる 波なみ」と、明らかに日本海の荒波を歌つた歌詞があり、これに類似する「天うつなみ けがらひ」も海を歌つた可能性が出て来た。そのため二〇一七年八月三〇日に北溟OBで筆者の二年先輩のR・T氏に電話でうかがつたところ、氏は日本海の荒波が岩場に打ち寄せる場面をイメージされていた。そこで直ちに北溟OBで一年先輩のH・K氏に電話で問い合わせたところ、氏はこれを筆者と同じく雲海と解されていた。さらに同九月九日にお目に掛かる機会があつた北溟OB五名(筆者の二年先輩四名、同期一名)と白梅OG二名(二年先輩と一年先輩)にうかがつたところ、雲海をイメージする者が三名(北溟二名・白梅一名)、日本海をイメージする者が四名(北溟三名・白梅一名)となり、先の筆者を含む北溟三名の結果と併せて一〇名中五対五(各北溟四名・白梅一名)ときれいに解釈が分かれた。日頃校歌に慣れ親しんで一緒に歌つていた金大寮生でも、改めて歌詞の解釈を確認し合うことがないまま漠然と自分が思い描くイメージを皆も共有しているものだと思ひ込んでいたが、実は解釈が真つ二つに割れていたことが判明するという興味深い結果となつた。同九月二日の金沢市・室生犀星記念館への問い合わせ、また同四日の金沢大学資料館への問い合わせでも、記念館として、また大学として歌詞の解釈に公式見解を出しているわけではないとのことでもあつた。もともと「天うつなみ けがらひ」は、雲海とも日本海とも解する余地のある両義性を備えたものとすべきなのである。

これを、天を打つて波立ちけふる海と解した場合、それは二行目と併せて、日本海に面する加賀平野から天高く白く聳える白山を仰ぎ見るといった日常的な視点において石川県の風土をスケッチしたものとなる。それは、郷土を代表するなじみの自然を詠み込む校歌の定石として、当該学校の写実的な描写の一部とならう。しかし同時にそこに、雲海を突き抜けて島のように浮かび上がる白山のイメージが重ねられていると解するならば、それは雲の上を飛ぶ鳥もしくは北アルプスの山頂に立つ登山者など、極めて非日常的な視点から眺められた幻想的で神秘的な白山と交錯して、当地の生活に密着した親しみ深いものであると同時に、当地の現実生活を越えた聖なる普遍性を暗示する象徴となる。

そしてこの冒頭の象徴としての白山は、その後の展開において戦後民主主義の理念によつて方向付けられ、戦後の新制大学である金沢大学の隠喩となるのである。まず「白ねの」に続いて「北方のみやこに学府のありて」が付けられることで、「北方のみやこ」が格助詞「の」の関係表現作用によつて白山に隣接する金沢であることが示されると同時に、「の」の属性表現作用によつて金沢が白山のように聖性を宿した特権的な地であることが暗示され、また有名な四高の寮歌「北の都」の歌い出しの「北の都に秋たけて」の本歌取りであることが明らかなる。「北方の都に学府のありて」によつて、この学府が金沢・四高の伝統を受け継ぐ金沢大学であることが同定される。そして「天そそる 白ね」のように高く理想を掲げる金沢大学の姿が「燦たる燈をかかげたり」と提示され、特権的な地・金沢に建つ金沢大学の隠喩として、白山が明確に方向付けられる。

以下この隠喩としての白山は、「民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した」日本國憲法の精神に則り「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育」という、一九四七年に制定され二〇〇六年に改正されるまでの教育基本法前文の理念を反映した文言によって肉付けされ、新制大学としての金沢大学のイメージを具体化する。第二連はまず「人は人をつくるため」と、福祉論吉「学問のすゝめ」の「天は人の上に人を造らず」を本歌取りする形で民主的な大学のあり方が示され、そこで人々が誇り高く「のろしをあげ」つつ対等の立場で「慧智の時を磨」いて切磋琢磨し、「光荣ある人間をつくらむ」として「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成」を期する様が述べられる。そして第三連で「新風文化の扉は開かれ／あたらしの人、世代にあふれ」と、「普遍的にしてしかも個性ゆたかな」新しい「文化」の世に「民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする」新世代が世に満ちあふれ、それらが高く聖なる白山にけふらいながら押し寄せる海もしくは雲海のごとく、手を取り合い才能を結び合つて「こぞりてわが学府につど」う様が絶唱され結びとなる。こうして高邁な普遍的理想を掲げる者の象徴としての白山のイメージを、戦後の「平和と民主主義」の理念によって方向付けることで、新制大学としての金沢大学のあるべき理想像を打ち出し歌い上げたものが「金沢大学校歌」であると言つてよい。冒頭で一気に簡潔かつ深遠な象徴を作り上げ、これを時代の思想に沿つて手際よく肉付けし、高度な芸術的完成を

実現している様は見事で、犀星の技の牙えが鮮やかである。

4 「金沢大学校歌」の後景 — 戦後日本の縮図 —

だがこのような「金沢大学校歌」を作詞した室生犀星、またこれを作曲した信時潔、さらに学長としてその制作を依頼した戸田正三が、いずれも社会に影響を及ぼす形で戦争遂行に関わつた過去を持ち、戦後においてもそのことを引きずつていた事実を、どう考えるべきなのか。今これを戦後日本の社会構造上の問題として捉える立場から、幾つかの事実を押さえておく。まず犀星は死の直前に上梓した「室生犀星全詩集」の自作解説で、一九四三年七月に千歳書房から刊行した詩歌集「美以久佐」について「本集に収録の戦争雰圍気のある詩はこれを悉く除外した。後年の史実に拠るためといふ再考もあつたが、詩全集の清潔を慮つたのである。この戦争中は詩も制圧のもとに作られ、今日、これらの詩を削除することは心のごりを見たくないからである」と述べる一方、一九三七年に大連から哈爾濱にかけ満州を旅行して制作した詩をまとめ五七年七月に冬至書房から刊行した「哈爾濱詩集」について「私にはこれらの朗吟風な詩が今日これを眺めて飽くことのないのも、もはや曠野がずつと我々とはなれてある景色になつたことと併せて、懐かしいといはざるをえないのである」と述べている。戦争詩を書いた過去を後ろめたく思ひながらもこれを直視することを避け、傀儡國家「満州国」についてはこれを懐かしむような心境を見せている。また信時潔は戦前に第二国歌と目され玉碎を伝えるラジオ放送のバックにし

ばしば流されもした「海ゆかば」の作曲者である。信時については、「海ゆかば」が多くの若者を戦場に送る形となつてしまつたことに心を痛めて戦後は東京芸大の文部教官としての地位を退き、自分の作品の著作権を一切辞退して著作権協会にも入らず、表舞台に立つことなく校歌や団体歌作曲などの地道な活動に専念したことが伝えられる。しかし、九百に近いとも言われる膨大な数の校歌を作り続けるに際し、過去を踏まえ新たな創作方針を表明したようなことは、管見の限りでは確認できない。さらに戸田正三は戦前に京大医学部長として、教え子の石井四郎を通じ石井が部隊長を務めた哈爾濱近郊の七三一部隊と深い関係を持つていた。敗戦後日本に帰国した七三一部隊の医学者は人体実験のデータと引き替えにアメリカによつて免責され、多くの教え子を部隊に送つたと見られる戸田は初代金沢大学学長に就任、七三一部隊との関係については語らぬまま医学界の重鎮となつた。「金沢大学校歌」の裏側には、戦争の影がべつたり貼り付いているのである。

この戦争の影で特に問題にしなければならぬのは、七三一部隊に端的に顕れる日本帝国主義である。七三一部隊撤退の際、捕虜を収容した独房の壁に「打倒日本帝国主義」と血書された文字が発見された¹⁵ことだが、七三一部隊はなくなつても、日本帝国主義は生き続けた。「パーシ関係（公職追放）明りようにならぬため」就任が遅れつつも学長になり、一九五〇年の入学式で「学生の学内政治活動は認めぬ」と発言して学生自治会から抗議され、急遽公募を撤回して老大家に無理な校歌制作依頼を強行する「戸田学長」の存在に、それは明らかである。この「戸田学長」の強引なトップダウン

ンと言ふべき措置により、新制大学の民主的なあり方を賞揚した「金沢大学校歌」が制定されるということは、極めて皮肉な事態である。

また常石敏一は、「医学界の石井機関の医学者擁護の典型としていわれるのが、一九五二年一〇月の日本学術会議第一三回総会での出来事」すなわち「細菌兵器使用禁止に関するジュネーブ条約の批准を国会に申し入れること」という提案の否決であつたとし、この総会で「条約批准促進の提案が否決されたことは、石井たちの行状を彼らの師がおおい隠し、かばつたものと理解されてきた」と述べる。そして提案に反対した法学者の我妻栄の論拠が「現在日本では戦争を放棄しているのであります、この戦争を放棄するときにおいて、戦時に問題になる条約に批准するということは筋が違ふ」というもので、これが当時の外務省の姿勢と一致していたこと、さらに戸田が反対を主張して「生物兵器は「四、五十年前に解決している問題でありまして、今日ほとんど実用になりません。実用にならぬものを苦勞までして日本で作るというばかりが出ましたら、そんなばかなことをするな」という勧告を私からよくいたしますから、どうかその点ご安心ください」と述べたことを指摘する。ここでの我妻の主張や外務省の姿勢には「現在日本では戦争を放棄している」という名分をオールマイティとする感覚が見て取られるが、その感覚の社会的共有が、「平和と民主主義」の理念を反映した「金沢大学校歌」を制定する一方で自分の関わつた七三一部隊の存在を否定するような新制大学学長の存在を可能にしていると言へる。

これら「金沢大学校歌」をめぐる諸事実は、戦後日本の「平和と民主主義」の理念が、戦後も執拗に生き残る日本帝国主義を、自分

とは無関係のもの、もしくはすでに克服されたものとする免罪符として機能する側面を持っていたことを浮き彫りにする。戦争指導者によって「ダマサレタ」という国民の被害者意識が「戦後民主主義」という新しい価値をスムーズに受容させる役割を果たすとともに、国民自身の戦争協力や戦争責任の問題を不問に付す機能を持った」とする吉田裕の指摘も、この「平和と民主主義」の「洗淨・作用について言及したものと見えよう。

室生犀星について言えば、一九五七年に屈託のない懐旧の情を以て『哈爾濱詩集』を上梓した二年後に「金沢大学校歌」を作詞する彼の感覚において、「王道楽土」「五族協和」と「平和と民主主義」とが矛盾することなく接続しているように見える。一九四二年、「満州国建国十周年」を機に哈爾濱で行われた哈爾濱特務機関記者会見席上で記者たちに「その王道楽土だが、関東軍精銳七十万が控えての満州国だということをお忘れないうでくれたまえ」「現実には満州は臨戦地域であつて、それだけに多くの問題を抱えている」と発言した特務機関長補佐が、「そんなことをツユほども考えていないようだがねえ……」と評した「一般の在満邦人」と同じ「帝国の市民」として、犀星は終生あり続けたものではなかったか。そして、「平和と民主主義」が「日米安保」とワンセットであつたという戦後の現実の一面を想起すれば、これは現在の日本人にとつても決して他人事ではないのである。

さらに信時潔も一九四二年に「建国十周年を期して」制定された「満州国歌」の制作に参画しているが、「海ゆかば」の帰結に鑑みて戦後に良心的な態度を取つたことが伝えられる信時が、「満州国歌」につ

いて何等かの態度を表明したという報告は、管見の限りでは見当たらない。あるいは信時自身にとつて戦後の自己処罰的姿勢は「満州国歌」の件を兼ねるものかも知れないが、この戦後の信時の姿勢を、自国の若者を死地に送る結果となつた「海ゆかば」との関連で語り、他国を侵略した「満州国」との関連では語らないという報告のあり方に、日本帝国主義が生きていると言わねばならないのではないか。

このような「金沢大学校歌」の後景は、帝国主義の克服を目指したはずの「平和と民主主義」の理念が、いつの間にか過去を忘却させ新たな帝国主義生成を助長してしまうという、戦後日本の逆説的な一面の縮図と言えよう。戦後になつたから、直ちに帝国主義が克服されるわけではない。むしろ、戦後は帝国主義克服の出発点に過ぎず、そのための不断の努力を怠れば、「平和と民主主義」はすぐさま形骸化するのである。「金沢大学校歌」はそのことを、いわばその基調低音に響かせて今に伝えて来ていたのであつた。

5 終わりに — 歌い継がれるべきもの —

しかし反面、「平和と民主主義」の時代に設立された新制金沢大学の理想像を歌い上げた「金沢大学校歌」が、その象徴性と思想性を以て高い芸術性を達成した感動的な校歌であることは、やはり否めない。限られた時間と形式において、当代一流の芸術家が持てる技量を存分に発揮した結果だが、帝国主義的感覚を温存する者も奮起させるほどに、当時新制大学というモチーフが魅力に満ちていたことの証左でもあろう。未だ戦争の影が色濃く残る戦後初期の日本

において、新制大学を生んだ「平和と民主主義」という戦後民主主義の理念がいかに人々に熱く希求され光り輝いていたかが、彷彿とされるのである。多くの血によって贖われた「平和と民主主義」を、真理探究の場で真摯に実践し、その深化発展を期そうとした金沢大学の原点が、「金沢大学校歌」を歌い継ぐことで、繰り返し確認されるべきであろう。同時に「金沢大学校歌」の成立事情を銘記することで、芸術家としての誠意を尽くして金沢大学の歩むべき道を照らす立派な校歌を制作した先人に感謝し、その恩に報いるためにも、不断の帝国主義克服への努力を誓って切磋琢磨し、真理探究の道を邁進することが、後に続く者の務めとなろう。

「新風文化の扉」を開く「あたらしの人」たらんとするところに、金沢大学に学び、また学んだ者の栄光が存するのである。その志が、気高く白く聳える白山の如く「燦たる燈」として掲げられる限り、「金沢大学校歌」は歌い継がれていくであろう。今なお慧智の時間を磨くのろしはあがつているか。手はつながら才能は結ばれ、歌声は響いているか。

注

- (1) 嶋田亜砂子「犀星の校歌作詞」(『室生犀星研究』第二九輯、二〇〇六年一〇月)及び金沢市・室生犀星記念館編「犀星校歌集」(二〇〇六年三月、同館発行)によると、室生犀星が信時潔とコンビを組んで制作した校歌は、一九五三年一〇月二九日制定の「金沢大学附属小学校校歌」を皮切りに、「金沢市立菊川町小学校校歌」(五四年九月二日)、「長野県軽井沢高等学校校歌」(五四

年九月一九日)、「金沢大学校歌」(五九年五月二九日)、「川崎市立南加瀬小学校校歌」(六一年二月三日)の五曲である。「犀星校歌集」所収の金沢大学附属小学校校歌・澤田幸平校長宛信時書簡には「歌曲に就ては室生先生御作詞が普通の数節同曲に適するものと異り、通作の体に適し候ため稍長くなり」という記述がある。「音楽中辞典」(一九七九年一月、音楽之友社刊)の「通作歌曲」の項には「詩の各節に異なる旋律がつけられた歌曲。詩の一節一節をくりかえして歌うように作曲された有節歌曲に対する語。劇的な展開をする内容の詩に適しており、シューベルトの《魔王》がその例」とあり、信時書簡の「通作」とは通作歌曲、「数節同曲」とは有節歌曲のことだろう。初めてコンビを組んだ際、信時が犀星の歌詞の独特の調子に合わせて的確な曲を付けることができたと自負している様子がうかがわれ、実際の出来映えも犀星にとって満足の行くものだったが故に、これ以後犀星が信時を信頼し、しばしばコンビの相手に選んだらしいことが考えられる。

(2) 「犀星校歌集」(前掲)。(1) 参照) 所収・金沢大学附属高校蔵の原稿「校歌について」で犀星は「私は旧高等小学の一年を修業しただけで、学校生活といふ微妙な友情がまるで頭がない、青年時代には君はどここの学校を卒業したんですかとたづねられると、私は靨い顔をしてわせた大学ですと少し低い声で答へた。わせた大学は牛込でしたかと聞かれると、私は田圃の中にあるのですとこたへた。早稲田だから畚分田圃のなかに大学があるのだらうと思つたからである。四十年前の青年にはどれだけ大

学といふものが、その卒業肩書にいりやうだつたかが判るのだ。ただの一年間でも大学といふものに顔を出して置けば宜かつたといふ考へが、三十代まで頭をはなれなかつたのである」と述べている。

(3) 全文引用に当たつては「犀星校歌集」発行元の室生犀星記念館よりご許可を戴いた(二〇一七年一〇月一八日電)。また金沢大学総務部総務課より「著作権は消滅しており、勝手な改変をしたり、名譽声望を毀損しない限り、著作物の使用は問題ない」とのご回答を戴いた(二〇一七年九月二六日メール)。各位のご高配に厚く御礼申し上げます。なお先に発表した拙稿「金沢大学北溟寮における伝承寮歌をめぐる一考察―戦後新制大学生精神史研究の試み」(4) 参照)では、「金沢大学校歌」歌詞の「光栄ある人を」を「栄光ある人を」と誤記していた。この場を借りて訂正し、お詫び申し上げます。

(4) この件に関しては拙稿「金沢大学北溟寮における伝承寮歌をめぐる一考察―戦後新制大学生精神史研究の試み」(「金沢大学資料館紀要」第一一号、二〇一六年三月)及び「金沢大学北溟寮における伝承寮歌をめぐる一考察・補遺―南下軍の歌」の他校伝播及び、パンカラ唱法、の出現とその意味をめぐる―(「金沢大学国語国文」第四二号、二〇一七年三月)を参照されたい。

(5) https://www.kanazawa-u.ac.jp/university/history_song なお(1)では歌詞は最後の二行が一連をなして合計四連で提示されている。

(6) 「室生犀星全集 別巻2」(一九六八年一月、新潮社刊) 所収。

(7) 葉山修平編「室生犀星事典」(二〇〇八年七月、鼎書房刊)の「かげろふの日記遺文」の項。笠森勇執筆。なお「優美な抒情詩」は吉田精一「室生さんの王朝物」(「室生犀星作品集月報5」一九五九年四月、新潮社刊)からの引用。

(8) 「新装版への解説「一日の光栄」前後」講談社文芸文庫「かげろふの日記遺文」(二〇一二年七月、講談社刊) 所収。

(9) 一九六二年三月、筑摩書房刊。なお本書で犀星が自作の戦争詩を除外したことについて伊藤信吉は「(戦争責任)の見地からすれば、この編集は逃避、輓晦だったことになる」と述べている(「室生犀星 戦争の詩人・避戦の作家」(二〇〇三年七月、集英社刊)一五八頁)。

(10) 瀬山詠子「信時潔先生のお人柄と歌曲」。「音楽現代」第三五巻八号(二〇〇五年八月) 所収。

(11) 中曽根松樹「音楽界戦後五〇年の歩み―人物楽壇史⑩ 信時潔」。「音楽現代」第二八巻一―号(一九九八年一月) 所収。

(12) 西耕一「黎明期の日本作曲界へ、正統派の太くまっすくな道を拓いた信時潔」。「音楽現代」第三五巻八号(二〇〇五年八月) 所収。

(13) 戸ノ下達也「音楽文化の日常化 山田耕筰と信時潔が日本の音楽界に遺したもの」。「音楽現代」第四五巻一―号(二〇一五年二月) 所収。

(14) 常石敏一「医学者たちの組織犯罪 関東軍第七三一部隊」(一九九四年五月、朝日新聞社刊。一九九九年九月刊の朝日文庫版を参照) 及び「NHKスペシャル 七三一部隊の真実」(エリ)

ト医学者と人体実験〜」(NHK総合テレビ、二〇一七年八月一三日放映)。

(15) 角川文庫・森村誠一『新版 悪魔の飽食』(一九八三年六月、角川書店刊) 二八三頁。

(16) 『金沢大学五〇年史 通史編』(同編纂委員会編、二〇〇一年八月、三九二〜三九三頁)。

(17) 前掲朝日文庫版『医学者たちの組織犯罪』(14) 参照) 二〇五〜二〇八頁。

(18) 岩波現代文庫版・吉田裕『日本人の戦争観 戦後史のなかの変容』(二〇〇五年二月、岩波書店刊) 五九頁。原書は一九九五年七月、岩波書店刊。

(19) 森村誠一『新版 悪魔の飽食』(前掲(15)) 一七一頁。

(20) 満州国史編纂刊行会編『満州国史 各論』(一九七一年一月、満蒙同胞援護会発行) 六九頁。